所へいでゝ看物にせしが、ある所にて、余○鈴木牧之も見つるに、大さ狗のごとく、狀は全く熊にして白毛雪を欺き、しかも光澤ありて、天鵞絨のごとく、眼と爪は紅也、よく人に馴て、はなはだ愛べきもの也、こゝかしこに持あるきしが、その終をしらず、白龜の改元、白鳥の神瑞、八幡の鳩、源家の旗すべて白きは皇國の祥象なれば、天機白熊をいだしゝも、昇平万歳の吉瑞成べし、

山家の人の話に、熊を殺こと二三疋、或ひは年歴たる熊一疋を殺も、其山かならず荒る事あり、山家の人これを熊荒といふ、このゆゑに山村の農夫は、需て熊を捕事なしといへり、熊に靈ありし事古書にも見えたり、

〔西遊記續編二〕熊膽

此地球○琥に木○熊土○熊とて二種あり、土熊は土の穴の中に住て、其體大ひなれども鈍し、木熊は枯木のうつろに住、其體小さくして建かなり、よく樹木の上に登る、其故に木熊の膽は小さけれども、氣味猛なり、土熊の膽は大にして鈍しといふ、又木熊の膽の中に琥珀手といふ物有、是も又上品なり、京都にて撰む所は加賀の熊膽を最上とす、信濃は少し大也、蝦夷松前より出るは格別大ひなり、然れども皆加賀の膽にはおとるといふ、熊も又松前は甚だ大ひにして、就中羆などは殊に大ひにして、よく牛馬を掴裂て喰ふ、人を害する事大かたならず、猛勢あたるべからずとぞ、彼地より來る熊の皮をみるに、毛甚だ深く皮大にして、毛の色金色なるも有、毛至て厚きものは、人の手を五ツ重ねて、猶よく毛の中に隱るゝあり、皮の大きさも疊三帖を隱すもの有、虎の皮三枚の大さあり、他國にはかゝる熊はたへてなし、

〔筆のすさび一〕一熊茄子をいむ事

熊は、茄子をいむ、深山の人、薪をこりにゆくに、かならず茄子を帶ぶことを見れば、熊必ずはしりさる、茄子野にあるときは熊膽小なり、茄子なき時は大なり、茄子を見せて、とりたる熊は、膽かな